

# 大学出版 '97 秋

No.35



The Association of  
Japanese University Presses  
大学出版部協会



大学出版  
35号

Autumn 1997

読書の周辺 活字から版木へ	田中 優子	1
——メディアの転換が新しい時代を作った——		
読書の周辺 著者にとつてのDTP	榊原 進	6
東アジアの大学における学術出版の意義をめぐって	山本 俊明	11
—— 第一回 日本・韓国・中国大学出版部合同セミナー報告 ——		
夏季研修会編集部会分科会報告		
索引作成の考え方と技術	中村 知広	15
「ホームページ作成講座」とインターネット	植村 八潮	16
歩く・見る・聞く——知のネットワーク		18
大学出版部ニュース		20
新刊案内 '97.7~'97.9		28
製作の現場から		33

表紙イラスト ヨーリスト・アマン『職人図鑑』より  
大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛  
〔書籍の価格は本体価格で表示〕

## 活字から版木へ

——メディアの転換が新しい時代を作った

田中 優子

本の作り方が変わることとは、新しいジャンルや新しい表現方法の出現につながる、と私は考えている。これは、江戸時代初期から江戸時代中期にわたる本の歴史を見ていて思うことだ。現代もまた、本の作り方、情報の獲得の仕方、コミュニケーションの方法が大きな変化をとげつつある。

私はイギリス滞在中にオックスフォード大学のコンピュータ・サービスが、英語をはじめ二三種類の言語で一三二〇種類の文献のフルテキストをネットワーク上に提供しているのを知った。オックスフォード大学では、人文分野の授業にこれを活用して学生に分析させている。フルテキストはあくまで分析のために使うのであって、本の代わりに読む人はいない。本や情報のコンピュータ化は読書を促すこととはあっても、書籍市場と対立することはないようだ。私はそれよりも、これが新しいジャンルの創出につながっていく可能性に関心をもっている。

大学に自分のホームページを作っている友人が、ある日シカゴの通勤電車の中からメールを受け取った。まったく

知らない人物からの、李白についてのエッセイだった。やがてシカゴのサラリーマンは李白や杜甫の詩の独自の英訳を、送って来るようになった。インターネット上では有名作家が小説を書いているだけでなく、文学や哲学や歴史についての新しいコミュニケーションが始まっているのである。私は従来の「評論」とは異なるジャンルがフルテキストや、あるいはこういうネット上の個人のやりとりから発生するのではないか、と見ている。

本の販売方法も変わってくるだろう。すでに英語圏の本で私たちはネット上の巨大書店をもっていて、かなり広い範囲の本を注文することができる。これを出版社ごとに、あるいは出版グループ（たとえば大学出版部協会）ごとに直接注文を受けるシステムを作ることは容易だ。江戸時代ではこれと同じく出版元が小売も行っていた。だから取次店はない。そのかわり本屋には多くの貸本屋が出入りしていて、一般の購読者は貸本屋から借りたり買ったりしていた。本の体裁や本の販売は変わり得るものである。

じつは、江戸文学の代表的なジャンルも、印刷方法の変化とネットワークの変化によって起こったものだった。

江戸時代の基礎が出来上がったのは、一五七〇年代から一六四〇年ごろまでのあいだである。年表上では一六〇三年が江戸時代のはじまりということになっているが、世界全体から見ると、むしろこの七〇年間が同じ方向性をもち、このあとに日本は方針転換をしている。印刷・出版の世界もそうだった。一六世紀の末に活字が導入され、民間に出版社が生まれ、やがて一六三〇年ごろをさかいに、版木に転換してゆくのである。

具体的にいうとこういうことだ。一一世紀に中国で發明された活字は一三世紀までには朝鮮半島で使われるようになり、一五世紀にはヨーロッパに伝わって活版印刷が始まる。一五九一年にバリニャーノと少年使節がヨーロッパから帰国した際、もってきた活字をモデルに和文鉛活字が作られ、三一点のキシリタン文書が印刷された。しかしこの系統の活字はキシリタン世界の中だけで終わる。

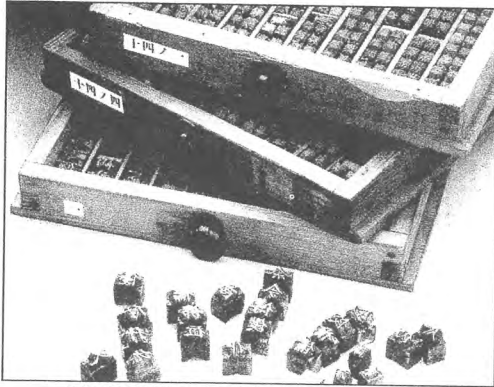
次に一五九二年、秀吉の命で武将たちが朝鮮半島侵略をすすめている途中、ソウルから活字を略奪してきた。持ち帰った個数は一説には一〇万個と言われるが、横山和雄氏（出版ニュース社『印刷文化と出版』）の計算によると、そのときまでに朝鮮半島で作られた活字は約三〇〇万字と推定される。日本人の略奪によって歴代鑄造の活字が「一空せり」と記録されていることから見て、もっと多くの活字

が持ち帰られた可能性がある。が、実際には朝鮮活字で印刷された本は日本に現存しない。これらは秀吉が後陽成天皇に献上し、記録では後陽成天皇版の『古文孝経』が朝鮮活字で印刷されたことがわかっているが、その後、朝鮮活字がどこに行ってしまったかわからない。

日本ではじめて作られた銅活字は、家康が朝鮮活字を天皇から借り、一六〇六年、それをモデルに伏見の円光寺の僧・元祐に総監督を依頼して作ったものだった。鑄造者は中国人の林五官で、場所は円光寺の円光寺学校（足利学校の分校）だったと言われている。これをもとに約八〇冊の本が印刷されており、それは「伏見版」と呼ばれている。

家康のこの事業はさらに二回、一六一五年と一六一六年に駿河で行われた。これが「駿河版活字」で、銅活字、木活字合わせ、都合三回で一一万個弱にまでなった。現在残っているのはその中の三分の一にあたり、銅大字八六六個、銅小字三一三〇〇個、木活字五八一三三個、銅野線八八個、銅輪郭一八個、摺板二面で、このすべてを現在は凸版印刷が所蔵している。これらの銅活字の成分は、当時使われていた寛永通宝と同じ成分であるとの分析結果が出ている。鑄造の材料や技術は、銅銭鑄造技術との関連が深い。

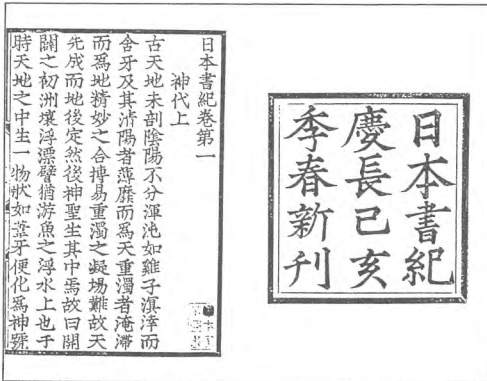
古活字本にはこの他にも後陽成天皇の版や豊臣秀頼の版寺院の版などがあるが、いずれも木活字である。そして注目すべきなのは早くも一六〇八年段階で木活字による出版は民間で始められていたことだ。これは、嵯峨本と呼ばれ



凸版印刷所蔵の駿河版銅活字 (1615—16年)

る本阿弥光悦の字を木活字に起こした、注文生産による美術稀少本と、京都の版元が商売として始めたものとに分かれる。が、いずれにしても、活字出版は禁中や武家や寺院に独占されることなく、たちまちコマースハルベースに乗ったのだった。

じつは古活字出版の命が短かったのは、このコマースハルベースに乗ったことと関係がある。嵯峨本のような注文生産や、初期の民間出版のように仏教書に限定されているあいだはよかったが、やがて『万葉集』『太平記』『平家物語』など一般向けの古典が活字で出版されるようになる。



古活字版『日本書紀』(1599年)

それと同時に、『伊曾保物語』『竹斎』『恨の介』などの新しい仮名草子というジャンルもまた、活字で出版されるようになったのである。一六三〇年もなかはを過ぎると出版物の種類は増える。仮名草子だけでなく、紀行、注釈、評論、俳諧集が出される。一六四〇年代に入ると、随筆や名所記、研究書、中国大衆小説の復刻本がそこに加わり、一六五〇年代末には仮名草子がいっきに増えるだけでなく、浄瑠璃本が出版される。そこにやがて芝居の脚本が加わったかと思うと、一六八二年にはベストセラー『好色一代男』が出現して、『浮世草子』というジャンルが形成されたの



山東京山作・歌川国芳画『臘月猫の草紙』(1842年)

だった。

この段階で完全に、大都市をベースにした日本の出版市場が確立する。早くもこの途中、一六三〇年代なかばには、出版業界は活字を断念した。大小合わせても約六〇種類の鑄型を作れば済むアルファベットと違い、漢字は大小で約八万の鑄型を必要とする。さらに片仮名と平仮名がそこに加わる。その上、嵯峨本が実際に行っていたように、連綿体に対応するための二続き活字と三続き活字の鑄型も必要になる。鑄型だけでこの数であるから、活字の数は出版部数が増えれば増えるほどさらに多くなる。もしこれを銅で行うとしたら、膨大な量の銅が必要になる。当時の日本は金も銀も輸出できなくなり、輸入品の精算は銅に頼っていた。民間で彫れ上がる活字に使うことは、とうていできなかつたろう。また木活字を手で彫るのであれば、これは板に彫るのと大差ないことになる。木活字は消耗が激しい。出版部数が増えればねんじゅう彫っていることになるので、活字のメリットはほとんどない。その上、読者層が庶民に及ぶにしたがって、漢字はルビを必要とするようになった。挿し絵も必要とするようになった。これらのことを含めると、出版マーケットの成立、識字率の上昇、読者層の拡大、大都市の成立、そのすべての要因が「版木による出版」をおしすすめたのである。

すでに述べたように、一五七〇年ごろから一六四〇年ごろまでの日本とその後の日本とは、めざす方向が異なっ

ている。中国、朝鮮、東南アジア各国、そして、それらアジアの情報と物資を媒介するヨーロッパ船との関係の中で立国しようとするのが、一六四〇年までの日本だった。媒介は銀であった。そういう日本にとっては、アジアの中で名実ともに「文明国」となるのが目標だった。つまり「中国」になることが、この時期の日本の夢なのである。しかし秀吉の朝鮮出兵は中国からインドまでの軍事的なアジア支配をもくろむもので、これが中国文化圏に受け入れられるはずはなかった。日本は朝鮮で中国軍に敗退した。

家康は軍事支配とは正反対の思想をもっていた。中国のごとき礼節と学問のある文明国になるのが、家康の考えだった。家康が活字鑄造に力を入れるのはこのためである。しかし家康の時代にはまだ、中国・朝鮮・東南アジアの物資や技術に依存することしか考えられなかった。一〇〇年後の日本が、貿易制限の中で達成する技術力と市場経済は、家康の想像を超えていただろう。一六三〇年ごろの日本は南米から世界に放出される銀の世界経済の中で購買力を失い、一八〇度の方針転換を余儀なくされる。一六四〇年までに新しい体制を整えると、日本は新田開発を精力的にすすめて、運河を開削し、沿岸水路を開発し、城下町を整え、街道を整備し、商人層を中心に市場経済を一気に拡大し、技術力を上げはじめた。活字が中国に並ぶ文明国をめざすことの象徴であるとすれば、版木による出版の拡大は、何の権威にも頼らない都市住民の活力の象徴であった。

版木への転換はそのような時代の変化の結果であるのみならず、次の変化の原因でもあった。中国大衆小説や詩集の輸入はさらに増えてくるが、版木によって可能になったルビ（両ルビ）の発達は、右側ルビによる漢字の読みだけでなく、左側ルビによる漢字の翻訳を可能にし、庶民向け翻訳文献が出されるようになった。『唐詩選』ともなると、文字が篆書や隸書や楷書や草書などいくつもの字体で表現され、絵を中心に製本されて『唐詩選絵本』となって大量に出版された。ベストセラー作家、井原西鶴は自分で挿し絵を入れて本を作り、同じころ、春画を中心にした春本も盛んに出された。浮世絵師は屏風から本の挿し絵に転換し、浮世絵は本の中で発達しはじめる。

江戸時代中期になると江戸の人口は一〇〇万人を突破して世界最大の都市になり、出版の中心も江戸に移ってゆく。江戸では本は絵と文とで成り立つのがあたりまえになり、そのような本を扱う出版業者、地本問屋（じほんどいや）、いわゆる絵草子屋が出現する。浮世絵はこの地本問屋の力で発達するようになる。やがて浮世絵師の修行の仕方は、まず挿し絵を描き、浄瑠璃本の表紙を描き、黄表紙を描き、最後に一枚絵やしりぞものを描く、という順序をたどるようになる。浮世絵師の出世と階梯は、本作りに完全に組み込まれるのである。

こうして、版木印刷への転換は、まず出版部数の大量化を実現して浮世草子を生みだし、次にルビの発達をうなが

して翻訳本↓翻案本↓読本を結果し、日本に本格的な小説の時代をもたらす。さらに余白に文字を組み入れた絵本の製作を容易にし、それが浮世絵師と作家の合作を可能にして膨大な各種絵本市場を作りあげ、絵本専門の版元である絵草子屋とその組合ができることとなる。一八世紀後半には、絵草子屋である鶴屋喜右衛門や葛屋重三郎は、絵本ジャンルを「滑稽」の方向に洗練して「黄表紙」と「狂歌絵本」を生み出す。歌麿、北斎、写楽、広重など名だたる浮世絵師は、そこから出現するのである。このような膨大なヴィジュアル分野の形成は同時に、それが対象とした遊郭、歌舞伎、各地の名所、旅の発達とネットワークを急速に作り上げていった。絵草子、細見、浮世絵はみやげ物として都市から地方に流出し、俳諧本、狂歌本、図版入り本草学の本は、地方に素人作家や町人学者のネットワークを作り上げる働きをした。

一六四〇年以降の日本は思想的にも技術的にも、中国・アジアへの依存から自立してゆく時期だった。活字が東アジア共有のメディアだとするなら、版木は日本特有のメディアだった。活字が文明の道具だったのに対し、版木は庶民の情報媒体だった。その意味で江戸時代における版木は、西欧における活版印刷と同じ意味を担ったのである。このように本作りの転換は、新しい時代とジャンルを生み出す。

（法政大学教授）

## 著者にとってのDTP

榊原 進

デスクトップパブリッシング（DTP）と言う語はこの十年ほどで定着した。コンピュータを使って、原稿の入力だけでなく、章節の見出しを付け、図を貼り込んだりしてページレイアウトを行い、版下出力までを卓上で行えるようになったのである。クォークエクスプレスやページメーカーなどに代表されるDTPソフトを使えば編集作業が効率化され、またページ番号を振るなどある程度の定型作業を自動化することができると。実際、多くのコンピュータ関連の雑誌の組版はこの方法で行われている。

文字が中心の書籍のほとんどは電算写植で組版されているが、その一方で $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ （ラテフ）という組版システムも使われるようになってきた。これもDTPの一種であるが、普通DTPというと同掲のレイアウトソフトを指すようで、このシステムの知名度は必ずしも高くない。しかし、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の組版能力は極めて強力かつ柔軟である。特に理工系の学術書の組版では近い将来これが主流になると思われるが、日本国内の編集や印刷に関わる専門家の間にその認識が薄く、欧米に

遅れをとっている。私自身はこれまで多くの論文と六冊の専門書を書くのにこの組版システムを使い、ポストスクリプト（PS）というページ記述言語の環境とを組み合わせて版下作成までを行ってきた。その経験を踏まえて、著者にとってDTPがどんなものであるか、そしてそれを取り巻く出版界がどんな状況であるかを考えてみたい。

かつて多くの著者は原稿を原稿用紙に書いた。もちろん、現在でもこのような手書きの原稿もあるに違いないが、原稿はワープロで書かれることが多い。ワープロでは文字の修正や文の切り貼りが容易であるし、文書の保存も楽である。また、プリントして読むときも原稿用紙より量が少なくて済む。反面、特殊な記号の入力は難しく、表などには思うような形式に作り難いし、図を挿入したい場合もある。数式の入力はほとんどお手上げである。ワープロでもこれらを扱うことはできるが、その機能はごく限られており、結局DTPソフトの登場となる。手書きでは文字も数式も図も紙面にペンで書かれるという点では区別がないが、ワープロやコンピュータの



扱うデータとしては、それぞれまったく別の形式となる。DTPソフトによってこれらを共通の土俵に載せることができるわけである。さらにDTPのメリットは、その名の通り版下を直接出力できることである。

こうして、著者は仕上がりページを見ながら執筆できることになるが、今後の出版においてこのことの意義は極めて大きい。たとえば、フラクタルの本を書くとき、その図を従来のようにトレースによって描くことは考えられない。著者はコンピュータで計算して図を生成し、これをページに貼り込んだ画面を見ながら執筆できる。本文の内容に合うように図を作り直すのもその場でできる。DTPは計算と執筆を統合する知的生産支援ツールとなるのである。これは、従来の本を書く作業の効率化にとどまらず、この方法が可能になって初めて書ける本も出版されることを意味する。また、この方法が使えるから著者になれる書き手も少なからずいるはずである。

多くの理工学書には数式や化学式が現れるが、これらを扱うには今のところ $\text{\LaTeX}$ に勝るものはない。複雑な数式はさまざまな種類と大きさのフォントを二次元的に配置して書かれるが、特にスペースの取り方は重要で、微妙な違いで式の意味が違ってしまうこともある。手書きの数式を電算写植で組版する場合は、著者の注意深い校正が必要であるし、フォントなどの指定をしてもその意志が写植機オペレータに伝わらないことも多い。 $\text{\LaTeX}$ 組版であれば著者が仕上がりを見

ながら入力でき、しかも大変美しい組版がなされる。一度これを使うとユーザーはほかの方法に戻れない。

$\text{\LaTeX}$ の使い勝手はクォークエクスプレスやページメーカーなどのDTPソフトと少し違う。後者は版下出力となる画面を直接編集する、いわゆるWYSIWYGであるのに対し、 $\text{\LaTeX}$ はマークアップ言語で、書き手は文章とコマンドの混じった入力ファイルを用意し、これを処理して出力を得る。したがって、修正は画面に表示された版下出力ではなく、元の入力ファイルを編集することによって行う。

文章にコマンドを埋め込むというと何やら難しそうであるが、実際にはそれほど複雑ではない。マークアップ言語であるから、章や節など文書の論理構造をコマンドで指定するだけでよい。この様な形式はインターネットのブラウザで読めるHTML形式の文書でも使われており、かなり身近なものとなっている。たとえば`\sectoint...`は節見出しのコマンドで、...のところに書かれた文字列が節見出しとなり、コマンドに続く文字列はこの節の本文となる。数式や表も同様なコマンドで入力することができる。数式の例を図1に、表の例を図2に示すが、このような入力文の書かれたファイルを処理し、それを表示させると図の下のような出力となるのである。

出力画面上を直接編集できないために $\text{\LaTeX}$ を敬遠する向きもある。しかし、 $\text{\LaTeX}$ が行う処理は極めて複雑かつ巧妙で、これを画面を操作するWYSIWYG方式で模倣するこ

```
\int_{-\infty}^{\infty} e^{-2x^2} \mathrm{d}x = \sqrt{\frac{\pi}{2}}
```

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-2x^2} dx = \sqrt{\frac{\pi}{2}}$$

図1. 数式の入力(上)と出力(下)の例

```
\begin{tabular}{|l|l|} \hline
システム & 記述 \\ \hline
\TeX & D. E. Knuth の作った組版システム \\ \hline
\LaTeX & \TeX コマンドの組み合わせによるマークアップ言語 \\ \hline
\end{tabular}
```

システム	記述
$\TeX$	D. E. Knuth の作った組版システム
$\LaTeX$	$\TeX$ コマンドの組み合わせによるマークアップ言語

図2. 表の入力(上)と出力(下)の例

とはとてもできない。たとえば図1の式では、指数の底の $e$ や変数 $x$ にはイタリック体、数字にはローマン体が使われており、指数 $-\infty$ は小さいフォント、その指数 $\infty$ はさらに小さいフォントで組まれている。積分記号はその内容に応じた高さを持っている必要がある。指数のフォントサイズと本文のフォントサイズの比率の選択はそれほど簡単でなく、電算写植による一般の和書では指数のフォントが小さすぎる。図1上段の $\LaTeX$ 入力例では式の構造が記述されているだけで、フォントの情報は含まれていない。フォントの種類やサイズの選択は $\TeX$ が式の構造に合わせて自動的に行う。WYSIWYG方式のDTPソフトでは、これらの調整を個々に手で行う必要がある。

$\LaTeX$ がそのままな処理を自動的に行うことができるのは、それに対応するアルゴリズムが組み込まれているからである。 $\LaTeX$ ではすべての文字にカテゴリーコードという属性が与えられており、文字列は単なるフォントの羅列ではない。たとえば普通の文字と開き括弧と閉き括弧は異なるカテゴリーコードを持ち、組合せによってそれぞれに適切なスペースが挿入される。数式の $\frac{1}{2}$ の入力に対しては $\frac{1}{2}$ が、 $\frac{1}{2}$ の入力に対しては $\frac{1}{2}$ が出力されるが、引き算と負の符号は区別されて異なる大きさのスペースが挿入されている。図1の数式も同様な例であるが、 $\LaTeX$ は至る所で巧妙な計算をしている。テキストをうまく分割して行を組み、段落を組み、ページに組み合わせをここで詳しく解説することはできない

が、実に見事なアルゴリズムである。

緩く組まれた行やうまく組まれていない段落にはペナルティーという数量が割り当てられ、ペナルティーを最小にする計算が行われる。さまざまなパラメータにそれぞれペナルティーが予め割り当てられており、それが組版に反映される。ユーザーはペナルティーの割当を変更することができるが、この方法で組版の仕上がりを変えることができる。言い換えれば、活版印刷の熟練した植字工による組版のノウハウをこのペナルティーの割当に翻訳すれば、それが反映された版下を作るができるのである。

電算写植による組版は活版印刷の組版より質が落ちると言われることがある。これは電算写植機的能力が低いためではない。一般にコンピュータ導入の目的は省力化であることが多い。それほど熟練しなくても誰でもそこそこに入力できるから、短期間に多くの電算写植機オペレータを養成することができる。実際、毎日これほどたくさんの本や雑誌が出版されるのは電算写植機のおかげであろう。こうして電算写植機には質を要求して来なかった。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>Xの、正しくはその元になるT<sub>E</sub>Xの意義は、コンピュータによる組版に質を要求することができ示したことを、しかもそれをアルゴリズムとして実装したことである。

しかしL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>Xユーザーは普通このような処理の内部を知らなくてよい。仕上がりページを見ながら本を書くには、いくつかの基本的なコマンドを使えば十分である。実際、著者が

思い通りの数式や化学式を書くことができるので、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>Xは理工系の論文を書く標準的なツールとなりつつある。

しかし、書籍は論文とは違い、章だてなどの論理構造の指定だけでは完成しない。表紙があり、ページには柱がついている。章おこしを中扉とし、概要やイラストが添えられていることもあるが、普通ノンブルはない。章の最後が奇数ページの場合には次の偶数ページは柱もない白紙とし、続く奇数ページから次の章を起すことも多い。節見出しは見やすい字体で書かれていたり、黒やグレーの枠に白抜き文字で、あるいは線などを組み合わせてデザインされている。和書の最後は奥付で、これには版權などの情報が記載されているが、出版社に特有の形式があるのが普通である。また、本文や見出しに使うフォントの選択、版面の大きさの決定なども本では特に重要である。これらの、主にデザインに関係した要素は本の顔を決めるものであり、そこに盛り込まれる余分の情報ゆえに本は本たり得る重要な部分である。

フォントやデザインの詳細を決めるパラメータの値はL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>Xのスタイルファイルに書かれているが、一般のユーザーはこれに手を加えなくてよいことになっている。そのためデフォルトのスタイルが暫定的に使われているのが現状で、折角本文が美しく組版されていても本全体としては魅力あるものにならない。一例として章見出しを図3に示す。上段がデフォルトのスタイルであるが、漢字と数字のフォントはミスマッチに見える。デフォルトでこの組合せとなるが、同じポイン

# 第5章 本のデザイン

# 第5章 本のデザイン

# 5章 本のデザイン

図3. 章見出し、デフォルト（上）、フォント修正（中）、さらに工夫（下）

トサイズであつても見た目に数字が小さすぎる。ともにポールド体としてあるが、漢字はゴシック体でこれはサンセリフであるから、数字をもっと大きなサンセリフを使つて中段のようにするか、下段のようにデザインしてしまふのがよいように思われる。

元来フォントの選択や本のデザインは出版の専門家が担当すべきものである。一般の著者は本のデザインについて詳しくはないし、スタイルファイルには手を加えず、論理構造を指定するコマンドを使えれば文書が書けるというのが $\text{DTP}$ ユーザーの原則である。本を完成するためには、編集者がスタイルファイルを編集することが望ましい。少なくとも、 $\text{DTP}$ 組版に関わる編集者はスタイルファイルの概要と意義を知るべきである。さらに、活版印刷で培われた植字技術をベナルタイに翻訳することができれば、かつて賞賛された活版印刷の質をよみがえらせることも可能で、実際これは作者クヌースが $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の開発を始めた動機であつた。本作りを総合的に扱う立場にある編集者は、懐古趣味に安住することなく、出版の文化を新しい技術に継承しなければならない。スタイルについての編集者の協力の下に、もっと多くの著者が $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 組版を利用することができるようになることを期待したい。

この稿のページは筆者自身が $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 組版し、PS出力で版下を作成したものである。縦組みは初めての経験であつたが、専門家のご批判を仰ぎたい。

（いわき明星大学理工学部教授）

# 東アジアの大学における学術出版の意義をめぐって

—— 第一回 日本・韓国・中国大学出版部合同セミナー報告

山本 俊明

## 三国大学出版セミナー開催の経緯とその意義

去る八月二八日から二九日にかけて、長野県諏訪湖ほとりにある諏訪レイクサイドホテルを会場に「第一回日本・韓国・中国大学出版部セミナー」が開催された。韓国から一九名、中国から六名、日本六八名、合計九三名の参加者であった。

これまで日本大学出版部協会は、韓国の大学出版部協会と、一九八二年以降昨年まで十五回にわたるセミナーを開催してきた。また中国大学出版部協会とは、これまで二回北京で合同ブックフェアを開催したほか、一九八八年には東京で合同セミナーを開催している。昨年韓国で開かれた日韓合同セミナーには中国大学出版部協会からも陪席で参加があり、その場で三カ国大学出版部の合同セミナーを開催することが決定された。このような経緯で、東アジアの大学における学術出版のありかたを考える第一回セミナーが開催されるに至ったのである。

開会にあたり、各国の代表から挨拶としてセミナーの意義、あるいは期待が述べられた。日本大学出版部協会から

山下正幹理事長が「各国の大学出版部協会の現状と直面している課題を明らかにし、それぞれの表情について、相互に理解を深めることを目指し……二一世紀を目前にして、学術出版をとりまく環境

変化、大学の変化に対する大学出版部の対応など、大学出版部に期待されている新しい役割と任務を問いなおすことが重要ではないか」と語られた。韓国大学出版部協会を代表して、金容徳会長（ソウル大学校出版部、部長）は「出版を通して高級学術文化の交流を促進することが、大学出版部の使命であり、そのためにこのセミナーが、



三国大学出版セミナー会場風景  
(1997年8月28日、諏訪レイクサイドホテル)



日本出版協会  
学出版部正  
幹事長 山下 正氏

東アジアの大学出版人が何をなさねばならないかを真摯に検討する場となることを期待する」と語られた。

また中国大学出版社協会から彭松建団長（北京大学出版社、社長）は「一九七九年「改革開放政策がとられた」から大学出版も大きな転換を迎えた。一〇〇を数える大学出版社は、中国の出版社全体の五分の一を占めるに至っている。交流を通して各国の大学出版社の特徴を学びながら、出版資金のことも共通の課題を見出し出したい」とセミナーへの期待を語られた。

### 大学における学術出版をめぐる主題発表

セミナー主題発表では、まず朴邦培氏（全南大学校・出版部出版課長）が「韓国における学術出版の振興方向について的小考」という主題で発表した。最初に学術書の定義がなされ、研究者を対象に伝達する学術研究書や研究報告書、また学術参考図書までが狭義の学術書であり、学術的な教養書や教材などは準学術書と呼ばれる。この狭義の学術出版は韓国においても必ずしもよい環境にないという。日本の状況と似ているが、厳しい入試を経て入学してきた大学生たちに「学究的な熱気がない」こと、学術研究のための研究費の支援が不足していること、コピーがまかりと

おり、部数の少ない学術書が打撃を受けていること、また学術書を取り扱ってくれる書店が大型店に限られ、流通が十分でないこと、図書館の資料購入費が不足していること、などである。学術出版の振興は、この課題を解決する方向で、出版振興基金を設けるなど学術出版に対する公的な財政支援が必要であること、公共図書館で学術書を一定部数買い上げるように働きかけるなど、学術書に対する需要をつくり出すこと、などが挙げられた。

次に中国大学出版社協会から彭松建氏（前出）が、「わが国（中国）における大学出版社の概況、問題点と対策」と題して発表した。中国では、一九〇二年に北京大学に出版社が設けられたが、一九五〇年代まで大学出版社は数社にとどまり、現在の一〇〇社に発展したのは、七〇年代後半の改革開放政策がとられ、大学教育が発展してからであるという。「大学出版社の主な目的は、大学の教学に必要な教科書・学術専門書・翻訳・辞典などを出版すること」であり、一九九六年に出版された教科書類と学術専門書は六〇〇〇点にのぼった。課題は、第一に社会主義市場経済



韓国出版協会  
学出版部正  
幹事長 金容徳氏

のもとで、出版資金を自ら調達しなければならぬことである。そのためには「読者のニーズに応じてテーマを選定し、経営を確実にし、資金の蓄積を多く」す

る必要がある。第二の課題は、大学出版社をうまく経営する、編集・出版の専門スタッフを養成することである。

最後に日本大学出版部協会から平川俊彦氏（法政大学出版局）が「大学出版部と翻訳出版——東アジアの視点で考える」という主題で発表された。最初に日本大学出版部協会の活動を簡単に紹介し、「現在の大学改革が大学出版部の出版事業にもさまざまな課題を提起しており、そこから事業の発展の契機を見出さなければならぬ」と日本の大学出版部の課題を示唆された。ただ発表の中心は、編集者として手掛けてこられた翻訳書を例示されながら、翻訳の質の問題、翻訳書出版の意味など、翻訳論をめぐっての議論に絞られた。

三氏の主題発表のあと、質疑と意見交換がなされたが、大学出版部が学術出版をする意義について共通するものの採算性の問題など捉え方の違いが際立ったのが興味深かった。金谷徳氏は、韓国の大学出版部が、経済性の問題で教科書、あるいは教養書などを出版する傾向があるが、一般出版社では出版できない学術書を出版するのが大学出版



中国大学出版部協会  
会長 彭建

使命と責任ではないかと主張された（学術書を出版するための公的助成が必要であり、政府に要請していることにも触れられたが）。これに対して、李朋義氏

（北京外国語大学外語教学与研究出版社社長・編集長）は、大学出版のタイプを、歴史のあるオックスフォード、ケンブリッジ大学出版部のように国の援助を受けているもの、一般出版物を数多く出して出版資金に当てているタイプと、国・財団の援助によって出版資金を得ているタイプ（例としてアメリカと日本の大学出版部を挙げられたがこれは誤解であろう）の二つに分け、「中国大学出版はその中間のタイプを目指している。一般の出版物で利益を得て学術書をだすべきではないか」と発言された。ここには各国の社会体制、大学出版部の歴史、などの違いが反映されていた。これらの発言から、大学出版に係わる共通の課題と各国の状況の違いをより明確に確認するための重要な議論に展開できたはずだが、残念ながら深まることはなかった。それは、同じ漢字文化圏にありながら共通言語をもっていないため、日本語、韓国語、中国語の間を通訳の言葉が行き交っているうちに、質問と回答にズレが生じたためで、はなはだ残念であった。

### 今後のセミナーに向けての課題

今回の第一回セミナーは各国の代表が指摘されたように「東アジアにおける大学出版部活動の歴史にとって画期的な意義」を持つものであった。なによりも三国の大学出版部が状況や歴史の違いにもかかわらず、大学を基盤とした学術出版の活動を発展させていきたいという共通の姿勢を

確認できたことである。歓迎レセプションの中で、中国の代表が、唐突と聞いていいほど、来年、北京で第二回を開催することを提案されたことも、共通の課題をさらに議論していきたいという意向の現れである。

この提案は、来年八月下旬、北京ブックフェアの前に開催されることで合意に達したが、いくつかの課題も浮かび上がった。

ひとつはコミュニケーションの方法の問題である。これは、国際交流をめざす以上避けて通れない課題であるが、通訳の問題が基本的にあり、理想的にいえば同時通訳の施設などが求められるべきであろう。

しかし一方で、何人かの参加者から意見としてだされた「共通のテーマと資料（基礎データ）」がコミュニケーションの基礎として必要ではないか。テーマについては、今回「東アジア漢字圏の未来を考える」が挙げられていたが、必ずしも発表者、参加者には主題として受け止められていなかった。準備段階での詰めが必要であろう。また、資料について今回は、日本大学出版部協会が主題発表を三カ国語で表したレジュメを作成し（大変な苦勞があったと聞いているが）、それが議論の土台になり三カ国語の通訳のむずかしさを補った。しかしより議論を深めていくためには、このレジュメとともに、それぞれの国で大学出版が置かれている状況を理解するための基礎データが必要ではないだろうか。

十五回続いた日韓セミナーは発展的に日中韓セミナーに解消されることになり、これまで長年にわたって交流の推進役として働いてこられた金相培氏（壇國大学校出版部、部長）に感謝の楯が贈られた。二カ国の合同セミナーは解消はされるが、これまで培ってきた日韓の大学出版の担当者レベルの交流は大きな意義を持っている。日中韓セミナーがさらに「東アジア大学出版部協会の設立」（金容徳氏）、「全アジアにおける学術出版交流と大学出版部協会の組織化」（山下正氏）という目標に展開することは、大学における学術出版のころざしを持つ者たちが交流の意義を確認しながらこのようなセミナーを地道に継続していくなかで実現していくのではないだろうか。

（聖学院大学出版会）



## 索引作成の考え方と技術

中村 知広

今回のテーマのねらいは「索引は誰が作成するのか、作成にあたってコンピュータをいかに効率よく利用するか、配列順はどのようにするべきか、『JIS 日本語照合順番規則』の問題も含めて考える」である。

分科会実施にあたり、夏季研修会小委員会では、事前に各部会担当者に索引作成に関するアンケートを行い、集計結果を出席者に当日配布した。

集計結果によると、部内で共通のルールをもっている出版部はほとんどなく、専ら編集者の裁量に基づいて索引作成を行っている。索引をつける本の種類としては、専門書、学術書をあげているが、著者の指示や出版期日とのかねあいではない場合もあるという回答もあった。また、誰が項目を拾うのかという質問に対しては、たいていの出版部で、著者と答えている。これは索引項目を拾うということは語句の不統一のチェックでもあり、著者が行うべき、とのことからである。一方で、著者以外でも可能な項目の並べ替えは、編集者という回答が半数を越えた。このように、大まかな点では共通した回答がみられたものの、方式（五十音順・電話帳式）、音引・数字・欧字等の扱いなどの配

列基準に関しては出版社ごとの違いが目立った。

報告については「総論」を東京大学出版会の小池美樹彦氏に、「JIS 日本語照合順番規則」を、東京電機大学出版局の植村八潮氏に担当していただいた。

まず、小池氏による、「索引とは」、「索引の種類」、「索引をつける本」、「索引と目次」、「索引は誰のためのものか」、「索引は誰がつけるか」、「良い索引・悪い索引」、「索引の作り方」などの基礎的知識についての報告が行われた。

次の植村氏は、項目の配列順が前後逆であったとしても、紙面の中では視界にはいるため、大きな差し支えはないが、データベース化して配列するには、そのようなあいまいさは許されないといった情報化に伴う問題点を指摘したうえで、その配列基準規格、『JIS 日本語文字列照合順番 JIS X 4061』についての解説を行った。

小池氏が強調した「よくできた索引をみればその本の性格やねらいがわかる」という言葉は、索引の重要性を改めて感じさせた。また情報化が進むにつれ、これまで各社・編集者により異なっていた索引作成ルール（特に配列基準）は統一の方向に向かうだろう。

（中央大学出版部）

## 「ホームページ作成講座」とインターネット

植村 八潮

出版社を対象とした「ホームページ作成講座」が日本書籍出版協会と東京電機大学理工学部の主催、大学出版部協会編集部会協賛で八月一日に開催された。当日は定員をはるかに超える一三六名の参加者という盛況であった。講座の報告を通して、出版社が熱心にインターネットに取り組む背景について考えてみたい。

書協は本年三月にインターネット研究会を設立し、七月までにホームページの運営や出版社の取り組みについて検討してきた。なかでも講習会への要望が強いことから今回、急遽実現したものである。

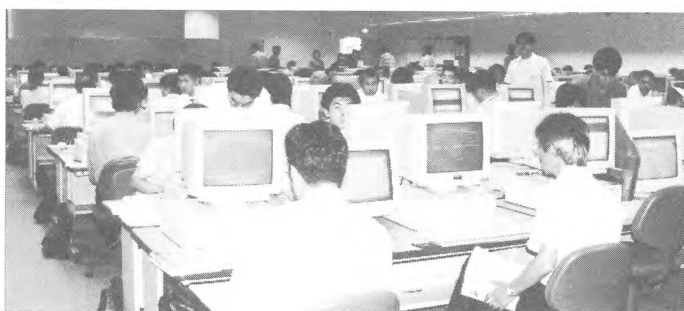
講義は矢口博之電大講師を中心に行われ、同大学の教員スタッフと、自分のホームページを持つ編集部会の有志など四〇名がアシスタントに加わった。当日は午前中WWWWの仕組みについての講義を行い、午後に参加者全員が一台づつパソコンを使用してホームページ作りを実習した。

インターネットの世界をのぞいたことのない人がインターネットの魅力と可能性について理解するのは困難である。同様にホームページが簡単な仕組みでできていることは作ってみて初めてわかる。参加者全員が自分のホームページを

短時間で作り終えたということは、インターネットの世界が「百聞は一アクセスに過ぎず」を示したといえる。

このように熱心な参加者を得たのは、インターネットサーブिसに対する読者の要望と出版界の期待の現れといえる。書協のインターネット研究会は最終的に二三三社となり、会員社の半数近くを占めている。会の成果をもとに書籍検索ホームページ (<http://www.books.or.jp>) が九月九日よりスタートした。これにより現在入手可能な書籍五三万点がインターネットから検索できるようになった。たとえば「ビッグバン」を書名キーワードとして入力すれば、宇宙論から経済、ビジネス書など、ビッグバンを書名の一部に用いたすべての本が検索できる。さらに著者名等の新たなキーワードで絞り込め、対応次第では検索した本から出版社の詳しいページに飛ぶことも可能である。すでに大変な話題で月五〇万アクセスに達する勢いであるという。

出版社のホームページでは、近くに書店のない読者のためのサーブिसとして直接注文ができる社もある。また売上げはわずかであるが、海外ではオンライン上のバーチャル書店が急成長した例もあり、今後の動きが注目される。



さらに、もともと少数で学術価値の高い専門書を本の形を取らずにデジタルデータのまま流通させる動きが活発となっている。研究者の間では、学術論文誌に投稿するよりも自分のホームページに論文を載せ、いち早く研究成果を公表しようという試みがある。これはギンスパーゲンヨックとして知られており、九一年にロスアラモス国立研究所のポール・ギンスバーグが電子論文の配布として始めた際に、学術情報の流通が紙からデジタルデータへ移行するとして注目された。インターネット時代では学術論文誌で査読されたという評価や権威よりも、掲載されるまでの長い期間がデメリットとなってきたとも言える。

これを機会に世界の学術出版社は、書籍の電子化とネットワークによる配信の研究を開始した。オランダのエリゼヴィア・サイエンス社は同社の発行する千二百種類におよぶ学術雑誌の電子的供給を始めている。またマグローヒル社のホームページを見ると、主に大学教科書を一部一頁単位で入手できるシステムが紹介されている。商業出版社だけではない。アメリカ大学出版社協会のホームページは加盟大学出版社の詳しい紹介だけでも圧倒される量である。

世界では学術専門出版の構造が大きく変わろうとし、国内出版社の動きも急である。これらが編集部会で今年度よりネットワーク出版研究小委員会を設けた理由でもある。今後とも本のデジタル化とネットワーク出版の可能性を探っていききたい。

(東京電機大学出版社)

## 童心にかえった夏の日

地下鉄博物館を訪ねて

「地下鉄の電車は、いったいどこから入れるんでしょうね。そのことを考えると夜も眠れなくなっちゃう」というネタで一世を風靡した夫婦漫才師がいた。小生は答えを知っていたので、いい大人たちが何でこんなことを話題にするのかと、得心が行かなかったものである。

膨張し続ける都市近郊の生活者、とくに毎日都心への通勤を余儀なくされる我々サラリーマンにとって、地下鉄は好むと好まざるとに関わらずお世話になっている生活の足である。その地下鉄のさまざまをこの機会に観て体験してみようと出かけたのが「地下鉄博物館」である。

「地下鉄博物館」は地下鉄で行くのである。東西線葛西駅のガード下（地下鉄といってもこの区間は高架）に展開している。まずは、切符を買って、自動改札を通って、という具合に鉄道に乗るときと同じ手続きで館内に入る。初めに目に付くのが、日本最初の地下鉄の車輛と、開業当時の上野駅を再現したゾーンである。日本で最初に地下鉄が

開業したのは一九二七年（昭和二年）で、現在の銀座線のもととなる上野〜浅草間、二・ニキロである。当時の制服や切符をはじめ、最近までの地下鉄のポスターなども展示され、レトロな雰囲気醸し出している。ただし、車輛なども含めて、七、八年前の銀座線の様子とあまり変わらないうという印象をもったのは気のせいだろうか。日本における地下鉄の歴史は比較的短い、とりわけ戦後の短い期間に、大都市圏においてまさに網の目のように張りめぐらされた地下鉄のことを考えると、都市の限らない膨張と、人間の利便さを求める欲望とが、もぐらのように地中を次々に掘り進ませ、とてつもない労力が注がれてきたことに思いを至さないわけにはゆかない。

このことは、次の「地下鉄をつくる」「地下鉄をまもる」というコーナーを回ればよくわかる。その先に「地下鉄車輛のしくみ」「地下鉄模型のレイアウト」があり、とくにメカ好きの男の子にとっては人気のコーナーであろう。ただ、小生が訪れた日の来館者層を見ると、たしかに男の子



地下鉄シールドトンネル

とその家族という組合せが多かったが、大人の男性から若い女性のグループなどもあり、各層の人たちがそれぞれの展示を楽しんでいるようであった。

夏休み中ということもあり、各種のイベントが開催されていたが、夏休みにかぎらずとさおり「トンネルを歩こう」という、開業前の現場の見学

会が催されているとのことであった。大都会の地下でどんなことが行われているか、興味のある人にはおすすめである。

最後のコーナー「地下鉄プレイランド」には模擬運転ができるシミュレーターが四つあり、そのうちの一つは車輛の前方部分をそのまま切り取ったもので、運転しながら実際の電車の揺れまでも体験できる。他の三つは、おのおの違う路線の運転台があり、それぞれの路線状況が前方のプロジェクターに映し出される仕組みとなっている。これこそがいま巷のゲームセンターでブームになっている、電車運転ゲームの元祖なのである。マスコンとブレーキレバーの二つを操り、いかにホームの所定の位置に電車をピタッと止めるか。これは経験と勘に頼らざるをえないが、模擬



運転シミュレーター

### 地下鉄博物館

〒134 江戸川区東葛西6-3-1

☎03-3878-5011

開館時間 午前10時～午後5時30分

休館日 毎週月曜日

交通 地下鉄東西線葛西駅

運転者の横にはかつて実際に電車を運転していた人が指導のためについてくれている。小生は完全に童心に還って、数回試みたが、できることなら何度でも続けたいと思うほど面白かった。ゲームセンターでこのゲームが流行るのも尤もであり、小生の一番の目当はこれだったのだが、噂にたがわぬ装置であった。

地下鉄延伸工事はいまま随所で進められているわけであるが、「地下鉄博物館」でしばしの間少年にもどった暑い夏の一日のことを懐しく憶いだしながら、小生、今日も地下鉄に乗って職場まで運ばれて行くのである。

(専修大学出版局・高橋泰男)



## 北海道大学図書刊行会

▼木村英明著『シベリアの旧石器文化』（B5判・八五〇〇円）十数年来、収集してきた膨大な資料を集大成し、加えて時代別、問題別に分析・考察。最新の体系的な叙述に基づきシベリア旧石器時代史を再構成しようとする、「日本列島への北からの道」解明のための基本図書。なお、類書の菊池俊彦著『北東アジア古代文化の研究』（A5判・八七〇〇円、一九九五年）は第十回浜田青陵賞受賞。

▼梶 雅範著『メンデレーエフの周期律発見』（A5判・七〇〇〇円）元素の周期律発見は十九世紀化学史上最大の発見である。その発見者がメンデレーエフである。本書はロシア語文献をはじめ入手可能な一次史料の分析を通して詳細に解説された周期律発見史の決定版である。

▼山口裕文編著『雑草の自然史―たくましさの生態学』（A5判・三〇〇〇円）野生植物と栽培植物のどちらにも属さず、両方の性質をもつ植物、これが雑草である。本書では、第一線で活躍する十六人の研究者たちが、雑草フロラの成立とその起源・適応力や生活史戦略について、さまざまな視点からアプローチする。

## 聖学院大学出版会

▼新刊はJ・L・アダムズ著（柴田史子訳）『自由と結社の思想―ヴォランタリー・アソシエーション論をめぐって』（本体二八〇〇円）がある。

民主主義がよく機能するためには、その社会の基盤に自発的な結社アソシエーションと自由な宗教的信仰があることを思想的に論じたものである。自由の根本概念と宗教的な信念とは、表裏一体をなすことが力説されている。

本書は、以前に『宗教の社会理論』（仮題）と案内したが、内容に即して書名を前記のように変更した。他にK・マルクス、M・ヴェーバー、R・ゾーム、E・トレルチ、P・テイリッヒの学説をヴォランタリー・アソシエーション論の観点から紹介しその批判を付す。原題は直訳すれば「宗教的に人間であることについて」となる。

著者はあまり一般には知られていないが、米国の神学者、社会倫理学者で、また市民運動の活動家として宗教・社会理論を実践に結び付けた。なお、訳者は聖学院大学助教授で、米国留学中にハーバード大で直接著者の指導をうけた。

## 慶應義塾大学出版会

…学術書の新刊三点をご案内します。

▼『比較 裁判外紛争解決制度』（石川明・三上威彦編著、三六〇〇円）は、注目を浴びるADR（裁判外紛争解決制度）についての諸外国の実例に基づいた比較法的研究です。

▼『民法の体系 市民法の基礎』（松尾弘著、五〇〇〇円）は、民法の基礎知識習得に必要な基本概念、条文の内容、判例・学説の考え方を整理し、民法の基本構造を明らかにする大著。

▼『第二次世界大戦の政治と戦略』（赤木完爾著、三八〇〇円）は、第二次大戦における連合国側の外交・軍事政策の動態を米・日の一次資料を駆使して探究。…その他、一般書・実用書をご紹介。

▼『決断と誤断 国際交渉における人と名言』（池井優者、二二〇〇円）は、幕末から現代の国際交渉をその最前線にあつた人々の名言とエピソードで描く。

▼『Keio UP選書『メルヘンの履歴書』（宮下啓三著、二二〇〇円）は、ドイツ・メルヘンの全体像を紹介。

▼『レポート・論文の書き方入門』（河野哲也著、一〇〇〇円）は、大学生必携書。

## 産能大学出版部

▼『戦略計画』創造的破壊の時代』（日・ミンツバーク著、中村元一監訳、黒田哲彦・崔大龍・小高照男訳、三八〇〇円）

本書の原書『THE RISE AND FALL OF STRATEGIC PLANNING』は、その発売以前から広く欧米圏で、いわゆる「ミンツバーク旋風」としてセンセーションを巻き起こした書籍である。

一九九六年一月九日付の「ファイナンシャル・タイムズ」では、過去の全書籍の中から選ばれた「最良のビジネス書50冊」のリストにも名前を連ねた。著者は、欧米で知られた経営学の権威である。

本書は、テイラー、ファヨール、クーンツ、スタイナー、ドラッカー、アンゾフ、ポーターをはじめ、世界的な権威者が主張・展開した戦略計画に関する論点を述べ、現在に照らしてその問題点をズバリ指摘し、これからの時代の戦略計画はどうあらねばならないか、大胆な提言を論じた名著である。

21世紀の戦略づくり、計画づくりに指針となる、戦略計画作成担当、経営幹部、管理者、研究者の必読書である。

## 専修大学出版局

▼大庭健、長谷川真理子他編『シリーズ性を問う』（全5巻、各巻二八〇〇円）

▼第3巻『共同態』は、類の再生産に関する所説を生物学的観点から近代批判まで集約。1章は動物の配偶システムを通し、ヒトの婚姻形態の生物学的側面を考察。2章はサル性の分析から人間の家族の起源に迫る。3章は精液の量やオーガズムの起こるタイミングなどの統計データを駆使して男と女の隠された戦略を提示。5章は性と宗教を結び思考を問い直し、近代化と神前結婚式の関連を探る。

▼第4巻『表現』は、進化生態学の視点から現代のメディアまで、各種の性表現を考察し、性差別の問題にふれていく。

1章では、雄間競争や、求愛信号に対する雌の選り好みを説明したのち、人間の身体的性的信号を論じる。3章では性の自己決定権を核に据え、強姦、身体障害、慰安と翼賛、出産などをテーマにしたパフォーマンスや写真や絵画作品をフェミニズム的視点でとらえている。5章は現代的メディアによる性表現の実態を検討し、権力による規制の論理的欠陥に言及している。

## 玉川大学出版部

▼天野郁夫『教育と近代化——日本の経  
験』(九〇〇〇円)

「初等義務教育の制度化」「工業化と  
技術者養成」「大学教授集団の形成」「講  
義録と私立大学」という日本の近代化過  
程における教育の問題を扱った四つの論  
文を集成。

▼天野郁夫編『大学を語る——22人の学  
長』(三〇〇〇円)

自ら舵を取り、さまざまな改革を成し  
遂げてきた個性的な学長たちが、変動期  
であればあるほど外部からはうかがい知  
れない大学の現実を、「たくまざる大学  
研究者」としての眼で語る。

▼J・ジョーンズ／渡辺学訳『聖なるも  
のの精神分析』(三七〇〇円)

フロイトとユングに始まる精神分析的  
な宗教研究をふまえた上で、今日の精神  
分析の代表的な理論家、フアアベアン、  
コフト、ギル、マイスナー、リッツト、  
リーヴィ、レオワルド、ウィニコットら  
の「関係のモデル」を扱う。次に、神の  
イメージの問題をさまざまな症例をあげ  
て具体的に取り扱い、聖なるものの精神  
分析の可能性を探る。

## 中央大学出版部

▼山内惟介・小島華子・橋場剛・石川洋・  
野村啓介『国際手続法』(二五〇〇円)

本書は国際法の教材として刊行された  
ものである。

内外国法を素材とするこの分野では、  
しかるべき実定法運用能力を限られた時  
間内に着実に付けることが求められる。

そのためには、受講者の問題意識や能力  
水準に対応した教材が必要となるはずだ  
からである。

国際取引法のうち、特に国際手続法が  
優先された理由は、利害の対立から生じ  
る紛争解決の包括的な構造や流れの全体  
像を最初に理解しておくことが学修上も  
かなり効果的であるという経験的な判断  
に求められる。また本書に収録された国  
際手続法上の各項目は本書の執筆に参加  
した学生の関心をそのまま反映したもの  
となっている。

本書で示されたそれぞれの思考過程を  
読者が主体的に追体験するならば、読者  
自身も新たな争点を発見したり、新しい  
解決策を提案することが十分可能となり、  
講義や演習もさらに一層活性化すること  
となる。

## 東海大学出版会

▼『ガードナーのおもしろ科学実験』  
秋山仁監訳、川北真由美・松永清子訳  
A5変型判／本体一四〇〇円

最近、子供の理科離れが話題になっ  
ているが、ただ知識を詰め込むだけの教育  
では理科に興味を失ってしまうのも当然  
である。

本書は、監訳者が日頃から提唱してい  
る体験型教育の手助けとして、「不思議」  
を体験できる一〇〇例の楽しい実験を、  
理科の苦手な人にもわかるように、やさ  
しい原理の説明とともに紹介している。  
また、これらの実験は、科学の本質に迫  
る重要な実験ばかりでありながら、すべ  
て私たちの身近にある道具や材料だけで、  
誰にでも簡単にできるものを選んだ。  
みなさんも大科学者になったつもりで  
実験してみよう。

### ガードナーの おもしろ科学実験

マーチン・ガードナー著  
秋山仁監訳 川北真由美・松永清子訳



東海大学出版会



## 東京大学出版会

▼『刑法から日本をみる』

前田雅英「東京都立大学法学部教授」

藤森 研「朝日新聞論説委員」

本体価格一八〇〇円

薬害エイズ、臓器移植法、厚生省汚職事件、オウム事件と破防法、連続幼女殺人、援助交際……。日本の社会に新たな質的变化が生じているいま、犯罪および刑罰を規定する刑法はどう対応していくべきか。

明治時代に取り入れたヨーロッパ型の「近代刑法理論」は、現実の流れの中できみが生じている。そして戦後以降、条文の厳格な解釈によって、被告人らの利益を擁護し、処罰範囲の限定をめざしてきた「形式的な犯罪論」も、明治以来基本的に改正されない刑法典と現実の間で修正を迫られている状況がある。

本書は、「医療における過失」「議員・官僚の腐敗」「組織犯罪の多様化」などの諸問題を明らかにしながら、新しい刑法理論や、社会システムの将来像を導き出す。刑法学者の理論と司法ジャーナリストの眼が交差する対談。

## 東京電機大学出版局

移動通信やインターネットが社会一般に普及し、技術者に限らず誰でも高度な情報技術を利用できるようになった。ビジネスインフラともなった通信ネットワークについて、標準化関連の本と技術入門書の二冊を刊行する。

▼肥田俊著『通信ネットワーク技術と標準化』（二二〇〇円）通信ネットワークの原理や、公衆通信を行う上での倫理規範でもある電気通信規約、電子化を可能とするITUの標準化活動や通信法規についてやさしく解説した。



▼荒谷孝夫著『通信ネットワーク』（二五〇〇円）大規模な通信ネットワークである電話網や、近年注目されている移動通信ネットワーク、ISDN等の最新技術を取り上げ、そのしくみと構成要素を工学的な立場から解説した教科書。

## 東京農業大学出版会

おすすめ図書

▼『名園の見どころ』河原武敏、一八〇〇円 全国の名園一六〇が紹介されている。名園めぐりを計画する時などに、たいへん便利。

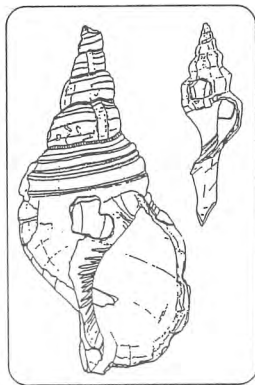
▼『野菜栽培あれこれ』米安辰、一四五七円 野菜について、もう少し知りたいたい、という方は必読の書。レタス・ゴボウ・フキの共通点など、ふだん気が付かない事も知ることが出来る。

▼『盆栽技術入門』植松敬、一七四七円 盆栽を始める人には、ぜひ読んでもらいたい書籍。著者の豊富な経験から、心がまえや、技術的なことなど、ていねいに、やさしく、図解入りで説明。



## 法政大学出版局

▼木下尚子著『南島貝文化の研究―貝の道の考古学』（日本生命財団出版助成図書／B5判上製／一万四二〇〇円）が、第六回・一九九七年〈雄山閣考古学賞〉を受賞しました。本書は「南島すなわち大隅半島と台湾の間に連なる全長一二〇〇kmの琉球列島に焦点を当て、縄文時代晩期から平安時代初期までの一三〇〇年間にわたり、そこに展開した貝文化、とりわけ装身具としての貝製腕輪や、その地域と日本列島本土との間で行なわれた貝交易ルートの実態を解明しようとした意欲的な研究書」（西谷正氏・選評より）であり、「随所に独創的見解が示されており、この分野の研究を大きく前進させた」（同）ことが評価されたものです。



## 放送大学教育振興会

▼放送大学では、新たに左記の地域学習センターを設置し、今年十月より学生を受け入れることになった。

- ・福島地域学習センター：郡山市桑野1-22-21（郡山女子大学内）
  - ・茨城地域学習センター：水戸市文京2-1-11（茨城大学内）
  - ・福井地域学習センター：福井市大手3-11-17（福井県民会館内）
  - ・鳥取地域学習センター：鳥取市湖山町西1-512（学習・交流センター鳥取内）
  - ・山口地域学習センター：（小野田市大宇通1-1-1（山口東京理科大学内）
- これで学習センター未設置の県は、和歌山・徳島・佐賀・鹿児島のみとなり、いずれも近々開設の予定である。これら地域学習センターが、放送大学の「全国化」の一翼を担うことになる。
- ▼七月十一日、放送大学学園において、平成十一年度開設予定科目の主任講師会議が開かれた。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、全体会議、分科会に出席した。これで平成十一年度開設予定科目（七十三科目）の印刷教材編集作業が正式にスタートした。

## 明星大学出版部

▼鯨井俊彦編著『特別活動研究』

A5判・本体一五〇〇円（税別）

本書は特別活動が人間形成上重要な教育活動として、学校の教育課程のなかで大きな比重を占めていることを踏まえて、次のような内容構成になっている。

- 第一章 特別活動の意義と課題
- 第二章 特別活動の変遷
- 第三章 小学校の特別活動
- 第四章 中学校の特別活動
- 第五章 新しい学力観に立つ特別活動の指導観と評価の在り方

なお、本書の特徴として、特別活動の基本的事項や、それが実際に教育課程のなかでどのように位置づけられているかなどをおさえたいうえで、更にそれが本場に実りあるものになっていると言えるか、今後どうあるべきか、などにも言及している。

▼明星大学出版部の定時株主総会において取締役の改選が行われ、長年にわたって出版部の出版活動を指導してこられた、塚田紘一通信教育部長が代表取締役を退任し、明星大学学長の田中誠之取締役が社長に選任され、就任した。

## 早稲田大学出版部

- ▼『ハワセダ・リブリ・ムンデイ』⑩『韓国の政治―南北統一をめざす新・先進国』(孔屋鎮・川勝平太編、一九〇〇円) ⑫『ドイツの企業―経営組織と企業戦略』(高橋俊夫・大西健夫編、二七〇〇円)を刊行した。前者は、南北統一を視野に入れて国際化を推進する韓国の政治を、統治機構や外交政策の分析をおして説明する。後者は、世界に展開するドイツ企業の実力を金融機関との関係、人事・労務管理などの観点から明らかにする。
- ▼『ドイツハンドブック』渡辺重範編、三八〇〇円) 東西ドイツの統合以来、ドイツはどう変化したのか。EUのリーダーをつとめる国の現状を、政治経済をはじめ、社会問題、文化などについて最新データを駆使して紹介する。



## 名古屋大学出版会

- ▼坪井秀人著『声の祝祭―日本近代詩と戦争―』(七六〇〇円) 日本の近代詩を〈声〉と〈書くこと〉の相克の歴史として捉え、そこに戦争の形を浮き彫りにする。付CD『戦争詩朗読放送の記録』
- ▼S・M・ゲインター著/和道光弘他訳『星条旗1777-1921』(三六〇〇円) アメリカという「想像の共同体」の創造に動員され、愛国主義の中枢へと上り詰めていった国旗の社会文化史。
- ▼田中眞晴編著『自由主義経済思想の比較研究』(六〇〇〇円) ヨーロッパ経済思想のメインストリームとして復権著しい古典的自由主義経済思想の種々相を現代的観点から多角的・比較史的に考察。
- ▼湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』(九五〇〇円) 現代に甦る魂の修辞。恋愛詩から宗教詩まで、「思想を感覚的に把握する」と評された希有な詩人の全詩集。第三四回日本翻訳文化賞受賞。
- ▼稲賀繁美著『絵画の黄昏―エドゥアール・マネ没後の闘争―』(四八〇〇円) 批評・美学と政治学が交錯する地点で「近代芸術」の成り立ち自体を問い直す。第一四回沢沢・クローデル特別賞受賞。

## 京都大学学術出版会

- ▼『耐震構造設計論』山田善一編著/戦後、わが国の耐震工学は、諸外国の地震被害の解析をも集積しながら、世界最高の水準に達した。しかし、死者六〇〇〇人を出した阪神大震災によって、その「最高水準の奢り」は敵しにくいさめられた。耐震工学は多くの犠牲の上に、ブレイクスルーを求められたのである。本書は、重い経験の上に立ちながら、最新の解析技術を駆使して、構造物の基礎から上部構造、地中構造物についての新しい時代の耐震構造技術の理論と実際を示したものである。
- ▼『動物の生態』森 主一著/日本の動物生態学をリードしてきた著者による、六〇年におよぶ研究の集大成。動物生態学の基礎概念、学説史から説き起こし、個体から群集までの各レベルにおける豊富な研究事例の紹介とその評価・位置づけを行う。さらに各レベルを統合して、動物だけにとどまらず、生物世界を一つの系とみなした生態系のレベルの研究にいたるまでの多岐にわたる内容を、自身の研究成果をまじえながら、古典から最新の文献までを駆使して詳述する。

## 大阪経済法科大学出版部

幾度となくこの新刊ニュースの枕として、日本人の歴史認識をめぐる「妄言」云々と書いたことがあった。ワンパターソンと言えそうなのであるが、「妄言」の方も懲りないというか、飽きずに繰り返されているというのである。真実追究を装いながら詭弁を弄することが、どうして「日本人としての誇り」を取り戻すことになるのか理解に苦しむ。取り締まるなら、ホラービデオより、こちらのホラーの方だとふと思ってしまう。

▼文道平編著『在日朝鮮人の歴史と現状』（仮題）日本による朝鮮植民地支配の結果、形成されるにいたった在日朝鮮人の歴史的過程を様々な角度から解明する。

「韓日併合条約」を分析しつつ、朝鮮植民地への過程と、その政策内容を検討。現状編では、在日朝鮮人の意識構造、人権問題を論じる。▼朴鐘鳴・朴宗彬著『近代における日本と朝鮮の関係』（仮題）朝鮮の開港から、「韓日併合条約」に至るまでの時期に、日本と朝鮮の間で締結された諸条約、諸協定などの中から重要なものを取り上げ、その原文を採録解説し、近現代日朝関係史を論じたもの。

## 関西大学出版部

▼石原敏子訳『対訳・百人一首』（一〇〇〇円）『百人一首』に収められた歌の持つ直接性、簡潔性を英語の自由律三行詩に表現。歌を縛るような約束ごとから解き放たれ、自由にイメージとリズムの世界に遊ぶ。原歌に詠われた情趣は、今日の私たちのものでもある。時間・空間を指標することを拒む映像（イメージ）を配し、現代性を強調する。▼平田重和訳『カミュ「異邦人」のムルソー』（一五〇〇円）著者はこの研究で『フィクションの内部に』身を置き、小説の主人公の性格を研究することを自らに課した。ムルソーは異教的気質の人。彼は無垢な風土の中に生き、自分の本性と自然が一致することを求める。そして彼が自分の運命の模範性を意識する時、一人の英雄となる。▼山本卓解題『浮世草子集』（二八〇〇円）元禄・宝永期の浮世草子の中で、影印の出していない都の錦作『元禄曾我物語』（元禄十五年刊）と『新武道伝来記』（宝永三年刊）を収録する。『元禄曾我物語』には朱筆の書き入れ、『新武道伝来記』には朱筆の傍線と鈴木白藤の識語が備わる。

## 九州大学出版会

▼デビッド・E・ナイ著『写真イメージの世界—ゼネラル・エレクトロニック社のコイポレート・アイデンティティ』（山地秀俊・山地有喜子訳・A5判・二七八頁・三八〇〇円）。一八九〇—一九三〇年に歴史上先例のない巨大組織を形成したGE社の画像情報公開史的側面に関する貴重な業績。写真研究としてもユニークであり、画像情報を用いた経営史研究としてもユニークである。

▼福田昇八・川西進編『詩人の王スベンサー』（四六判・五四六頁・五二〇〇円）。イギリス・ルネサンスを代表する詩人スベンサーの楽しさと偉大さを英文学を愛する一般読者を対象に平易に語る二十五編。寓意詩『妖精の女王』からベストセラー『羊飼の暦』ほかの小品に愛詩人スベンサーの技とところを描き出し、ワーズワスらへの影響を明らかにする。

▼異民族・異文化間の共生を課題とする教育学の確立を目指した二著を復刊。①江淵一公著『異文化間教育学序説』（A5判・五九六頁・九五〇〇円）、②小林哲也・江淵一公編『多文化教育の比較研究』（A5判・三七八頁・五八〇〇円）。

## 東北大学出版会

東北大学出版会叢書(『TUPP叢書』)  
の刊行はじまる。読者に知の世界をコン  
パクトにまとめて提供する叢書。

▼TUPP叢書① 西村貞二『歴史学の遠  
近』(本体価格一六〇〇円) 歴史家で  
ある著者が歴史とは何かについて、歴史  
の見方、歴史書の読み方、歴史家の姿勢  
等の視点から長年に亘って思索を重ねた  
跡をまとめた。二部構成からなり、第一  
部は、歴史についての所感をまとめ、第  
二部は、マキアヴェリ、ブルクハルト、  
ホイジンガ、トインビー、マイネッケ、  
トレルチら、歴史家の事跡を、著書・思  
想・主張から論じている。

▼TUPP叢書② 梅木達郎『放浪文学論  
―ジャン・ジュネの余白に』(本体価格  
一六〇〇円) 人生において、放浪とは  
何か。著者は、出発点をもたず、到達点  
をもたぬことと定義し、それはどこから  
来たのか分からず、ひたすら通過するこ  
とだとする。はたして人間においてこの  
定義に該当する「放浪者」がいるのであ  
ろうか。ところが、ジャン・ジュネがい  
たのだ。本書は、この放浪者の「放浪」  
の背影を克明に論じる。

## 流通経済大学出版会

「洋式馬車がわが国に入ったのは、定説  
では横浜開港以後となっておりますが、わ  
たしが調べたところでは、これ以前に既  
に二両入っていることが分ったんです。  
一両は二代將軍秀忠の元和年間であり、  
もう一両は八代將軍吉宗の享保年間なん  
です。このことを発見したのはわたし  
初めてだと思います。そこで先日お渡し  
した原稿に一章追加したいのですが……」  
と原稿追加の申し入れをしてきたのは、  
先日入稿した『江戸の阿蘭陀人定宿長崎  
屋物語』の著者坂内誠一氏からであった。  
本書は江戸時代三世紀にわたって、オ  
ランダ使節が江戸参府時の定宿として、  
長崎の出窓といわれた長崎屋について東  
西交渉の文化的視点からその実態に迫っ  
たものである。

数多くの内外の史料に丹念にあたり、  
多くの研究成果を援用して通史としてと  
りまとめた力作であり、東西交渉史の研  
究者にとっても、一般の歴史愛好者にとっ  
ても必読の一書である。

総ページ数約二三〇ページ、予価二五  
〇〇円、十一月月上旬発行予定

## 大阪大学出版会

国家と民族と言語の深淵な亀裂は言語  
と文化の世界同一性と自己同一性の背反  
的苦惱のなかで拡大するのか。

▼藤本和貴夫・木村健治編『言語文化学  
概論』A5・二八二頁・二五〇〇円。

言語文化をめぐる国際関係、言語コミュ  
ニケーション、言語情報科学、応用言語  
技術、地域言語文化論の五部構成で、新  
しい学問領域の内容と方法・対象を確認  
し、その可能性を追求する。

▼脇田修・岸田知子著『懷徳堂とその人  
びと』四六・一五〇頁・一五〇〇円。  
近世思想史と大坂町人文化のなかで位置  
づけると共に、個性あふれる学風や輩出  
した人びとをやさしく紹介。現代的テー  
マ「独創的な文化を生む風土とは」を考  
えるうえで興味深い書。

▼全史料協監修『文書館用語集』B6・  
一六〇頁・一五〇〇円/十一月刊。

文書館は記録史料を文化遺産として将  
来に残し利用に供する活動をなす。世界  
に流布している英語版の五〇〇項目に日  
本独自の用語五〇〇も加えて簡潔に定義・  
解説。英和対訳の索引も付す。図書館・  
歴史資料館関係者にも必携の書。

# 新刊案内 '97・7・9

## ■北海道大学図書刊行会

空知の自然を歩く 改訂版 岩見沢地学懇話会編 一六〇〇円  
 極地の科学―地球環境センサーからの警告 福田正己・香内 晃・高橋修平編著 一八〇〇円

## 実践と相互人格性

―ドイツ観念論における承認論の展開 高田 純 六〇〇〇円

## ■聖学院大学出版会

自由と結社の思想―ヴォランタリー・アソシエーション論をめぐって J・L・アダムズ／柴田史子訳 三八〇〇円

## ■慶應義塾大学出版会

メルヘンの履歴書 宮下 啓三 二二〇〇円  
 決断と誤断―国際交渉における人と名言 池井 優 二〇〇〇円  
 第二次世界大戦の政治と戦略 赤木 完爾 三八〇〇円  
 レポート・論文の書き方入門 河野 哲也 一〇〇〇円  
 講演集 わが学問 わが教育 慶應義塾大学通信教育部編 一二〇〇円

## 節約と浪費―イギリスにおける自助と互助の生活史

パウル・ジョンソン／真屋 尚生訳 三〇〇〇円

## ■産能大学出版部

もう上司なんかアテにするな 岡部 博 一六〇〇円  
 オフィス事務のカンタン改善 日本HR協会編 一九〇〇円  
 目標達成と新しい人事考課

産能大学「共働による人事制度」研究会 二〇〇〇円  
 仕事減らして利益を生み出すシステム改善法 森谷 宜暉 二〇〇〇円

## 「戦略計画」創造的破壊の時代

H・ミンツバーク著／中村元一監訳 三八〇〇円  
 はじめての家づくり 三島俊介編著 三〇〇〇円

## 資材マンのための倒産処理マニュアル

構造的变化の時代のマネジメント 奈良 武 二八〇〇円  
 国境なき弁護士たち 陸田 守正 一九〇〇円  
 思えば叶う 矢部 正秋 一六〇〇円  
 マルチメディア社会の知識ビジネス 高橋 福八 一五〇〇円

## デイビス ポトキン著／中西晶・竹田昌弘訳

管理者のEXCEL仕事術 ビジネスソフト研究会 一六〇〇円  
 国際人事管理入門 竹内 規浩 二八〇〇円

## ビッグバン 貯蓄・家計得する超運用術

矢田晶紀と21世紀生活トレンド研究会 一五〇〇円

## ■専修大学出版局

シリーズ性を問う3〈共同態〉 大庭健他編 二八〇〇円  
 シリーズ性を問う4〈表現〉 大庭健他編 二八〇〇円

## 今村力三郎訴訟記録 帝人事件(4)

専修大学今村法律研究室編 四一七五円

## ■玉川大学出版部

ドイツの異文化間教育 天野正治編著 六二〇〇円

大学再生への挑戦—アメリカの大学改革論—

R・ソロモン、J・ソロモン／山谷洋二訳

五六〇〇円

子どもの事故と安全教育—生活のなかに潜む危険—

荻須隆雄・齊藤敦能

ハンドベル演奏の手引き

D・マッケーニー／千葉佑訳

大学国際化の研究

江淵 一公

聖なるものの精神分析

J・ジョーンズ／渡辺学訳

スキー学習サポートシステム for Windows SKI COSMOS

玉川学園体育センター編

開かれた大学授業をめざして—京都大学公開実験授業の一年間—

京都大学高等教育教授システム開発センター編

教育と近代化—日本の経験—

天野 郁夫

大学を語る—22人の学長—

天野郁夫編

中央大学出版部

社会保障と生活最低限

中央大学経済研究所編

ドイツ都市経営の財政史

関野 満夫

国際手続法(上)

山内惟介・小島華子・橋場剛・石川洋・野村啓介

東海大学出版会

日本産蠶類幼虫・成虫図鑑Ⅱ

シジミチヨウク

ガードナーのおもしろ科学実験

M・ガードナー／秋山仁監訳

物理・工学のためのラプラス方程式の解法

松浦武信・高橋宣明・吉田正廣・小島紀男

ハンセン症医学—基礎と臨床

斎藤肇・長尾榮治・牧野正直・村上國男編集

心電図ワーク・ブック(ヘメディカル・アトラスシリーズ2)

東海大学医学部付属病院中央臨床検査センター編

水とからだ

佐藤威監修 飛田美穂

固体電子論の基礎

小泉義晴・高橋宣明

東京大学出版会

魂のライフサイクル—ユング・ウィルバー・シュタイナー—

西平 直

グローバリゼーション—地球文化の社会理論—

R・ロバートソン／阿部美哉訳

中世人との対話

笠松宏至

戦争と大学—東京大学における学徒動員・学徒出陣

東京大学史料室編

民法Ⅱ 債権各論

内田 貴

世界の地形

貝塚爽平編

大日本史料 第一編補遺(別冊二)

大日本史料 第五編之三十一

大日本史料 第九編之二十一

大日本史料 第十編之二十二

大日本史料 第十二編之五十四

大日本近世史料 廣橋胤公武御用日記 四

大日本維新史料 類纂之部

井伊家史料二十

大日本古文書 幕末外國関係文書の四十六

東京大学史料編纂所編

大日本古文書 家わけ第十

東京大学史料編纂所編

東京大学史料編纂所編

東京大学史料編纂所編

東京大学史料編纂所編

日本關係海外史料 オランダ商館長日記 譯文編之八(下)

帝國議會貴族院委員會速記録 昭和篇90 東京大学史料編纂所編 五五〇〇円

帝國議會衆議院委員會速記録 昭和篇91 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

帝國議會衆議院委員會速記録 昭和篇92 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

大日本史料 第五編之二十六 東京大学史料編纂所編 一二〇〇〇円

大日本史料 第十二編之二十六 東京大学史料編纂所編 一五〇〇〇円

オスマン帝国とイスラム世界 鈴木 董 四八〇〇円

アメリカの奴隸制と自由主義 辻内鏡人 六四〇〇円

イギリスの産業発展と証券市場 飯田 隆 五六〇〇円

日本イメーজの交錯 アジア太平洋のトポス(UP選書一七五) 山内昌之・古田元夫編 一八〇〇円

帝國議會貴族院委員會速記録 昭和篇91 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

帝國議會衆議院委員會速記録 昭和篇92 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

大日本史料 第五編之二十七 東京大学史料編纂所編 一二〇〇〇円

大日本史料 第十二編之二十七 東京大学史料編纂所編 一五〇〇〇円

初期プラトン哲学 加藤信朗 五〇〇〇円

朝鮮仏教史 東洋叢書1 鎌田茂雄 三四〇〇円

近世日本地主制史研究―資本主義と地主制― 水本邦彦 五八〇〇円

中国近代史 西嶋定生 七二〇〇円

中国近代史 岡田与好 一六〇〇〇円

ニューディールとアメリカ資本主義―民衆運動の観点から― 秋元英一 八二〇〇円

日本における労使関係の展開 兵藤 剣 八二〇〇円

聖書の言葉を超えて―ソクラテス・イエス・グノーシス― 宮本久雄・山本 巍・大貫 隆 三二〇〇円

日系カナダ人の歴史 飯野正子 四〇〇〇円

企業内福祉と社会保障 藤田至孝・塩野谷祐一編 五五〇〇円

自然の文化人類学 松井 健 三二〇〇円

刑法から日本をみる 前田雅英・藤森 研 一八〇〇円

日本の対米貿易交渉 谷口将紀 五六〇〇円

現代アメリカ政治と公共利益―環境保護をめぐる政治過程― 久保文明 四六〇〇円

市場と制度の政治経済学 金子 勝 三四〇〇円

現代マクロ経済分析―転換期の日本経済― 浅子和美・吉野直行・福田慎一編 四六〇〇円

過渡期としての一九五〇年代 中村隆英・宮崎正康編 五四〇〇円

イントラ・アジア貿易と新工業化 中川信義編 四八〇〇円

意識をつくる脳 腰原英利 三八〇〇円

地球システムの化学―環境・資源の解析と予測― 鹿園直建 五四〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書 昭和篇92 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

帝國議會貴族院委員會速記録 昭和篇93 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

帝國議會衆議院委員會速記録 昭和篇94 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

大日本史料 第十二編之二十八 東京大学史料編纂所編 一五〇〇〇円

東京電機機大出版局 東京電機機大出版局編 一七〇〇円



電気設備技術基準 審査基準・解釈

東京電気大学出版社編

九〇〇〇円

超電導工学―現象と工学への応用

松葉博則

四〇〇〇円

熱・流体・空調の計算法〈機械計算法シリーズ〉

越後雅夫

二三〇〇円

改訂新たな品質経営への挑戦

―ISO9001に基づくQSG9000

高林貞夫

三五〇〇円

学生のためのC++

Mathematicaによるプレゼンテーション―創作グラフィックス

中村隆一

二二〇〇円

通信ネットワーク技術と標準化

川瀬宏海

四〇〇〇円

通信ネットワーク〈理工学講座〉

肥田 俊

二一〇〇円

新・国際経営論〈人文・社会科学セミナー〉

荒谷孝夫

二五〇〇円

岩森龍夫

二〇〇〇円

■東京農業大学出版社

■法政大学出版社

両性平等論

F・プーラン・ド・ラ・パール／佐藤和夫他訳

三六〇〇円

歴史の不測・付論 自由と命令／超越と高さ

F・レヴィナス／合田正人・谷口博史訳

三五〇〇円

異端の思想

G・アンダース／青木隆嘉訳

五二〇〇円

性と暴力の文化史―文明化の過程の神話Ⅲ―

H・P・デュル／藤代幸一・津山拓也訳

六六〇〇円

文化の擁護―一九三五年パリ国際作家大会―

A・ジッド他／高橋治男他編訳

七六〇〇円

貝IⅤⅢへものと人間の文化史83

理論の意味作用 T・イーグルトン／山形和美訳

二二〇〇円

光と影のドラマトゥルギー―20世紀における電気照明の登場―

W・シヴェルブシュ／小川さくえ訳 三八〇〇円

政治の病理学 K・F・フリードリヒ／宇治塚美訳  
書くことがすべてだった―回想の20世紀文学―

A・ケイジン／石塚浩司訳 二〇〇〇円

十七世紀イギリスの急進主義と文学

C・ヒル／小野功生・圓月勝博訳 五〇〇〇円

都市とグラスルーツ M・カステル／石川淳志他訳 一四〇〇〇円

大航海時代の東南アジアI―貿易風の下で―

A・リード／平野秀秋・田中優子訳 四二〇〇円

浄土真宗寺院の建築史的研究

◎日本生命財団出版助成図書 櫻井 敏雄 二三〇〇円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版社

■早稲田大学出版社

ドナウ河の社会学

ドイツハンドブック

エイジング大辞典〔新装版〕

G・L・マドックス編、同刊行委員会監訳 二二〇〇円

叢書 ワセダ・リブリ・ムンディ

⑩ 韓国の政治―南北統一をめざす新・先進国―

孔屋鎮・川勝平太編 二九〇〇円

⑫ ドイツの企業―経営組織と企業戦略―

高橋俊夫・大西健夫編 二七〇〇円

水野祐著作集(全10巻)第8回配本／第8巻

通論 日本古代史(Ⅱ) 土器時代篇 七〇〇〇円

シリーズ比較家族(第1期全10巻)第9回配本／第9巻

家族と死者祭祀 孝本貢・八木透編 三四〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇(全18巻)第15回配本／第13巻

遠西独度涅烏斯草木譜 II 杉本つとむ編 三二〇〇円

R・シャンピニイ著・平田重和訳 一五〇〇円

■名古屋大学出版会

声の祝祭―日本近代詩と戦争― 坪井秀人著 七六〇〇円  
星条旗 1777―1924 S・M・グインター／和田光弘他訳 三六〇〇円

自由主義経済思想の比較研究 田中眞晴編著 六〇〇〇円

■京都大学学術出版会

アルケ―1997―関西哲学学会年報No.5― 関西哲学会編 一五〇〇円  
岩倉使節団とイタリヤ 岩倉翔子編著 三二〇〇円

耐震構造設計論 山田善一編著 五二〇〇円  
環境としての自然・社会・文化 有福孝岳編著 二二〇〇円  
動物の生態 森 圭一 六八〇〇円

セネカ『悲劇集 1』〈西洋古典叢書I・2〉 大西英文他訳 三八〇〇円

セネカ『悲劇集 2』〈西洋古典叢書I・4〉 大西英文他訳 四〇〇〇円

アテナイオス『食卓の賢人たち 1』〈西洋古典叢書I・3〉 柳沼重剛訳 三八〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

韓国官僚制の研究―政治発展との関連において― 田中誠一 三一〇〇円

五〇〇〇年前の東アジアへアジア研究所研究叢書6〉 村上行弘編 三二〇〇円

■関西大学出版部

浮世草子集 山本 卓解題 二二八〇〇円  
対訳・百人一首 石原 敏子訳 一二〇〇円  
カミュ『異邦人』のムルソー―異教の英雄論―

■九州大学出版会

多文化教育の比較研究〔第三版〕―教育における文化的同化と多様化― 小林哲也・江淵一公編 五八〇〇円

沖繩の集落景観〔第三版〕 坂本 磐雄 七〇〇〇円  
SASによる経済分析入門〔改訂版〕 時永 祥三 一八〇〇円

豊かな地球社会への展望〈九州産業大学公開講座11〉 写真イメージの世界 二〇〇〇円  
―ゼネラル・エレクトロニクス社のコーポレート・アイデンティティ―

デビッド・E・ナイ／山地秀俊・山地有喜子訳 三八〇〇円  
詩人の王スペンサー 福田昇八・川西 進編 五二〇〇円

■東北大学出版会

聴覚と言語の世界 永渕 正昭 二五〇〇円  
歴史学の遠近 西村 貞二 一六〇〇円  
放浪文学論 梅木 達郎 一六〇〇円

■流通経済大学出版会

交通の改革 政治の改革―閉塞を打破しよう― 角本良平 二八〇〇円

■大阪大学出版会

懐徳堂とその人びと 脇田 修・岸田知子 一五〇〇円  
言語文化学概論 藤本和貴夫・木村健治編 二五〇〇円

▼Kさん、お元氣ですか。熱帯のうまい季節になりましたね。「いつだつてうまそうに飲んでるじゃないか」って言われそうだけど、ま、時候の挨拶です。深くは追及しないで下さい。

▼この前、お手紙をお出ししてから、もう五、六年になるでしょうか。すっかりご機嫌を損ねてしまったことを、思い出します。「私信をワープロで書くとは何事か」と……。僕としては反論したかったのですが、あまりの剣幕に引き下がってしまった。でも、もう時間もたつたことだし、もう一度、この問題を蒸し返させて下さい。

▼Kさんは常々、「俺は活字で育った。活字がなかったら今の俺はなかった」と言っていましたよ。そうなんです、活字（印刷された文字、の意味で）を信じている人たちが、いわゆる活字中毒者に、ワープロ嫌いが多いのです。とても不思議なことです。小説は作家の草稿を読まない限り、何の意味もない、とか、翻訳なんて、著者の書いた字形とはまるで違つてしまつて

いるのだから、そんなものを読んでも仕方がない、とか言う人はいいでしょうに。

▼活字を信じるということは、結局は人間の言葉が、何かを伝え得ると信じていることではないのでしょうか。問題は中身です。書いた人の気持ちです。道具や容器ではないのです。だとしたら、なぜ私信をワープロで書いてはいけないのでしょうか。

●製作の現場から 16

## Eメールによる 〈手紙の時代〉

▼もちろん、手書きが悪いというわけではありません。水茎の跡麗しい達筆の手紙を貰えば嬉しうらやましいと思えます（貰ったことはないですが）。たとえ金釘流であつても、きちんと書かれた手紙には、相手の誠実さを感じることもあるでしょう。でも、書いてはみたものの文章を直したくなり、何度も書き直したあげくに誤字を見つけ、くた

びれきつて投函するのをやめてしまつたというような経験はないですか。それならむしろ、道具は何でもいいから、こまめに手紙が書けたほうがいいんじゃないでしょうか。筆勢や文字の乱れから、相手の感情を推し量ることはできないにしても、印刷された文字だつて十分に、思想を、感情を、想いを伝えられるのです。だからこそ活字は、何世紀にもわたつて、受け継がれてきたのです。それを信じなければ、出版なんて仕事はやつてられませんよ。

▼今頃になつてこんな話題を持ち出したのは、今、電子メールに対して同じようなことが言われているからです。これまた不思議なこと。ワープロで打たれた手紙と比較したら、電子メールが異なるのは配達手段にすぎません。業務上の連絡ばかりではなく、議論もできるし、喧嘩もできる。ラブレターだつて書けますよ（相手がいれば、ですが）。今日は手紙が来ていないのではないかと、何度も郵便受けを見に行く気持ち（はるか

昔のことで、もう忘れてしまいました）と、パソコンを立ちあげて、メールがきていることを期待してネットワークに接続するときの気持ちとに、何の違いもありはしません。

▼新しい文化が新しいメディアを生み、新しいメディアが新たなジャンルを生み出すことは、当然あり得るでしょう。電子メールも何かを生み出すかもしれません。その辺は僕には判りませんが、田中優子さんが書いている文章を参考にして下さい。僕が言いたいのは、もつと単純なこと、言葉によつて何かを伝えようとするなら、電子メールだつて必要にして十分な機能を持っているということ。

▼岩崎恭子ちゃんじゃないですが、これまでの人生で、現在ほどに手紙を書いた時期はありませんでした。正直に言えば億劫な時もあります、電子メールによる新しい〈手紙の時代〉の到来を予感してもいます。

▼朝夕は冷え込むようになりましたね。ご自愛下さい。 不一

# 大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-3584 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238 FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935 FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7—3—1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷町2—14—1 TEL. 03-5228-6271 FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 0425-91-9979 FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121 FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-77 宮城県仙台市青葉区片平2—1—1 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX. 06-877-1614

大学出版(第35号)'97秋 平成9年10月1日発行 発行所/大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956

頒布価格100円 千共